

かがわしつき (2) 香川漆器のみりよく

かがわしつき
香川漆器には、どのような技法があり、どうやって
つく
作られているのか調べましょう

かがわしつきには、いろいろな技法があります。蒔醬、存清、彫漆、後藤塗、象谷塗の5つの技法により、美しい作品や製品がたくさん作られています。

かがわしつきとして受け継がれてきた五つの技法って、どんなのだろう。

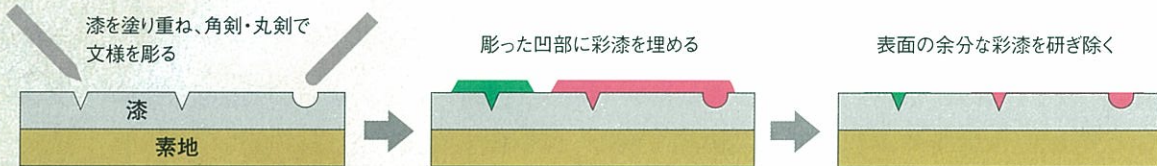


きんま 蒔醬

竹や木の素材の上に、黒漆（黒い漆）を十数回塗り重ねた表面に、ちみつな模様をケンと呼ばれる彫刻刀で線を彫り、そのくぼみに色漆（朱の漆など）

を埋め込みます。

色ごとに彫りと埋め込みが何度も繰り返され、最後に、表面を平らに研いで完成させる独特の技法です。その格調の高さと華麗な模様は、香川漆器の王者と言えます。



きんま
蒔醬むらさき箱
いそい まさみ さく たかまつし びじゅつかんどう
磯井 正美 作（高松市美術館蔵）



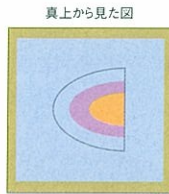
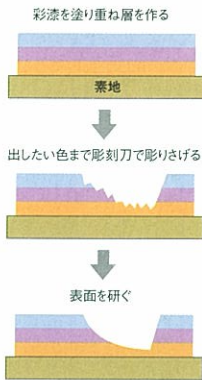
らんたいきんまきんまはこはるかぜのす
籃胎蒔醬茶箱春風之圖
おわた ひとし さく かがわけんぶんかいかんどう
太田 儂 作（香川県文化会館蔵）

彫漆

色漆を数十回から時には、百回以上（百回で厚さ約3ミリ）塗り重ねて色漆の層を作ります。たとえば、赤漆を三十回、緑漆を三十回といった具合に塗り重ねます。そして、その表面を彫刻刀で彫り、美しい模様を作り出す技法です。



ほしい色の層まで表面を彫り下げることにより、埋もれていた漆の色があらわれ、芸術性豊かな絵模様が彫り出されます。繊細で美術的価値が高い彫漆は、室内インテリアとしても評価されています。



ついでくまつがうらごうごう わすれかいごうごう
堆黒松ヶ浦香合（忘貝香合）
たまかじぞうこくさく かがわけんぶんかいかんぞう
玉楮 象谷作（香川県文化会館蔵）



ちょうしつつきのはなてはこ
彫漆月之花手箱
おとまるごうどうさく たかまつしびじゅつかんぞう
音丸 耕堂作（高松市美術館蔵）



ぞんせいはいなちようもんてはこ
存清花蝶文手箱
かがわぞうせきさく かがわけんしつげいけんきゅうしよぞう
香川 宗石作（香川県漆芸研究所蔵）



ぞんせいいろっかくごうぼん
存清六角香盆
いせいじよしんさく たかまつしびじゅつかんぞう
磯井 如真作（高松市美術館蔵）

存清

玉楮象谷が中国の技に、新しい技を加えて日本的なものにしたものです。中国での呼び名をそのまま使っています。

黒漆を塗り重ねた表面に、筆を使って色漆で模様を描きます。そして、その模様の輪郭や細かい部分を彫刻刀で線彫りし、くぼみに金粉などを入れて仕上げます。文箱や丸盆などの生活用品として親しまれています。

● 鎗金細鈎填漆法

彫りくぼめた所に彩漆を埋め平面にする
文様の輪郭や細部を彫る



● 鎗金細鈎描漆法

彩漆で文様を描く



文様の輪郭や細部を彫る



後藤塗

後藤塗は、別名「梧桐塗」とも書かれることがあります。発案者である後藤太平の偉業をたたえて「後藤塗」として広く知られています。

朱漆の表面を手でなでて凹凸を作って仕上げます。それにより独特の模様が生じます。

当初は、茶道具に塗られていましたが、大正時代の初めころからは、香川の特産品として、座卓、小箱、盆などにも塗られるようになり、広く普及しました。

香川では、どこの家庭でも一点や二点は使っているというぐらいまでに発展しました。



象谷塗

香川漆器の始祖といわれる玉楮象谷の名を取り、「象谷塗」と近年呼ばれています。

木地に漆の塗りを繰り返して、最後に池や川辺に自生する真菰の粉をまいて塗る技法で、茶たぐや丸盆などに多く使われています。



たまかじぞうこくからげんだいへと、かがわしっきのぎほうは どのように受け継がれていったのでしょうか

かがわけんには、うるしきがたくさん生えているわけでもなく、適した木がたくさん取れるわけでもありません。漆器作りに適した雨が多く湿潤な気候でもありません。そうした条件の中で、漆器づくりが盛んになったのは、すぐれた技術とそれを育んだ人々の活躍があったからです。

1 明治時代



磯井如眞
(1883年～1964年)

象谷の弟の藤川黒齋、その子どもの蘭齋などがその技法を受け継ぎ、全国に蒟醬・存清の漆器を紹介しました。

1907(明治40)年ごろから、木彫に色漆をほどこした讃岐彫が盛んになってきました。電気で動くロクロを使って、多量に生産できるようになったからです。この時代は、象谷の技法を受け継いだ彫りの名手が出てきました。



音丸耕堂
(1898年～1997年)

2 大正時代から昭和時代の初め

展覧会に入選することを目指す漆芸作家たちが出てきました。その中心で活躍したのが、磯井如眞です。

象谷や黒齋などの作品を通して研究し続け、大正時代の初めに、点彫り蒟醬を創り上げました。これは、象谷塗の線彫を点で彫ったものです。点の大小や粗密によって濃淡をつけ、奥行きと立体感を表すことに成功しました。如眞は、象谷を心の師(先生)と尊敬して、研究を重ねたそうです。そして、ほとんどなくなっていた香川漆器をよみがえらせました。

音丸耕堂は、新しい色材料を使って、これまで以上の豊富な色彩の作品を創り出しました。



香川宗石
(1891年～1976年)



磯井正美
(1926年～)

3 第二次世界大戦後

蒟醬・存清が無形文化財に選定され、その技術記録の製作者に蒟醬で磯井如眞、存清で香川宗石が選ばれました。

1955(昭和30)年に漆芸で音丸耕堂、1956(昭和31)年に、蒟醬で磯井如眞が人間国宝に認定されました。その後、1985(昭和60)年に磯井正美、平成6年に太田儔がそれぞれ蒟醬で認定されています。

また、1976(昭和51)年には、蒟醬・存清・彫漆・後藤塗・象谷塗が伝統的工芸品に認定され、現在へと受け継がれています。



太田儔
(1931年～)

かがわしっせき
香川漆器のすばらしさを未来へと引き継いでいくために、
何が必要なのでしょう

ふるさと香川が誇る伝統的工艺品「香川漆器」。しかし、その出荷高は1991（平成3）年をピークに減少し、現在は、その年の約20%までになってしまいました。江戸時代からのすばらしい技術と伝統を絶やすことなく未来へと引き継いでいくことは、今を生きる私たちにとって大切な課題です。この課題の解決に向け、今、さまざまな取り組みが行われています。

かがわけんてんとうこうげいし
1 香川県伝統工芸士の認定

現在、香川漆器や丸亀うちわなどで105名の職人さんが認定されています。

伝統的工艺品の技術や技法を若い人へと引き継ぎ、後継者の育成などを図るために、すぐれた技術や技法と一定の経験年数を持っている職人さんを、香川県が香川県伝統工芸士として認定するものです。

かがわけんしつげいけんきゅうじょ
2 香川県漆芸研究所

香川漆器の技術を未来へと伝えるため、技術者の養成と技術の研究向上を図ることをねらいとして、1954（昭和24）年に全国で初めてつくられました。

ここで3年間、技術を学んだ人たちが、美術工芸作家や漆器産業界などのさまざまな分野で活躍しています。

しっせきほんらい
3 漆器の本来のよさを追究する現代の漆芸家

香川漆器の素材となる漆は、そのほとんどが中国産です（90%以上）。しかし、国産の漆には独特の色合いや質感があり、そのよさに魅力を感じ、復権させようとする漆芸家たちがいます。善通寺に工房を構える漆芸家の松本さん夫妻です。二人は、香川県漆芸研究所の卒業生です。

松本さんたちは、溶材を一切使わずに、自らが採取した漆をそのまま塗り重ねて作品を作っています。また漆の木

すばらしい伝統を未来へと残したいなあ。
どんな取り組みをしているの？ぼくたちにできることは何だろう。



漆芸研究所で学ぶ生徒たち



漆を採取する松本さん

「中国産のものは、いろいろな産地のものを混ぜて作るので、確かに品質は均一であるが、漆本来の個性や味がなくなる。その点、国産の漆は、産地によって性質が全く違うので、うまく使い分けることで微妙な色合いや質感が引き出せ、表現の幅が広がる。また、实用強度にすぐれ、漆本来のよさを理解してもらうには、やはり国産漆は欠かせない。」

かがわしっき すば みちか かん 香川漆器の素晴らしさを身近に感じてもらうために

平成17年1月、高松工芸高校漆芸科3年生の4人の生徒さんたちが制作した、漆を用いた携帯電話のパネルが、製品化されることが決まりました。



携帯電話に「漆」を使う、この素晴らしいアイデアは、どのようにして決まったのですか。

「課題研究」の授業で、社会に貢献するための活動のひとつとして、漆をPRすることを決めました。

より多くの人に、香川県が誇る「漆芸」を身近に感じてもらうようにするためには、何に漆を使ったらよいか相談しました。おもちゃ、文房具…と考えた一つに携帯電話がありました。若い世代の人たちに広めるために、最もよい方法ではないかということで決まりました。



作品を作るときに苦労したことは何ですか。

「香川漆芸」独特の蒔罫、存清、彫漆の3技法を生かしたものになるようにすることを心がけました。

デザインは、100種類ぐらい考えたのですが、漆芸では表現がむずかしいものもたくさんありました。

また、制作途中で失敗すると初めからやり直さないといけないのでそれも大変でした。



製品化されると聞いて、どんな気持ちになりましたか？



夢が実現して、うれしいです。「漆を用いることで、絵にボリューム感ができます。機械製品なのに手仕事の柔らかさもできます。落ち着きもできます。これは、香川生まれの漆芸の技法を用いたものです。」と多くの人に「漆芸」を知ってもらえるチャンスが広がったと思います。

また、自分たちが実行したことが、どんな人たちに役立っているのか知りたい気もします。



香川県漆器工業組合

漆器が広く普及するように、毎年、玉藻公園の披雲閣やサンメッセ香川などで漆器まつりや、新作見本市などの催しをしています。最近ではカタログ販売もしているそうです。

また、子どもたちに香川漆器のよさを体験してもらえるように、伝統工芸士さんに連絡を取り、各学校での体験教室のお世話もしてくれています。